

文化財学習会

ふ る さ と 探 訪

テーマ 国分尼寺跡周辺を散策する

講 師 渡 邊 誠（高松市文化財専門員）

平成20年 4月27日（日）

共 催 高 松 市 歴 史 民 俗 協 会
高 松 市 教 育 委 員 会

はじめに



【菅原道真が漢詩に詠んだ法華寺の白牡丹】

国分寺町地区は、四方を山に囲まれた小平野を形成しています。北には国分台、東に伽藍山、六ツ目山、堂山、南に火ノ山、西に鷲ノ山が連なっています。現在では、交通の利便性から高松市の一つのベッドタウンとして人口が増加すると同時に、宅地開発などが進み年々町の状況も変わってきていますが、今もなお、多くの自然が残るとともに、多くの文化遺産を伝え守っている地域です。

古くは国分台遺跡といった旧石器時代の遺跡が確認されています。また、古代の国道である南海道はこの地を通っており、町名の由来ともなった讃岐国分寺が奈良時代にこの地に建立された

ことはあまりにも有名です。この他にも今回訪れる讃岐国分尼寺、府中・山内瓦窯などの官営の施設が集中して整備されていることから、古代においてこの周辺の地域が属していた阿野郡が讃岐国の中心として位置付けられていたことが分かります。また、中世段階のものとしては、多くの山城や、楠井遺跡などの土器生産遺跡なども確認されています。また、『南海通記』などにも香西氏との関わりの中で、所々に登場する地域でもあります。このように様々な形で時代ごとに地域の状況が確認できる資料が残っており、そのような点からも現在の国分寺地区は古いものと新しい文化が共存しつつ地域が形成されているのです。

今回のふるさと探訪は、この国分寺地区の中でも、北東部に位置する新居地区に残る古代から中世にかけての歴史遺産を中心に、近代化遺産も含めて巡ってみたいと思います。



【法華寺の山門】

1 摩尼輪塔 まにりんとう

摩尼輪塔とは石造物の一種です。



【摩尼輪塔】

摩尼輪塔とは、そもそも、仏道の苦しい修行に耐え、仏道を極めた者の位をあらわすもので、その意味から、寺院という神聖な空間との境界を示し、そこに立ち入る際に乗り物から下りる（下乗）という意味を示すものとなったと考えられます。それゆえ、下乗石とも呼ばれ、寺院などの聖域の入口に建てられ、この塔の先から参拝者は馬などの乗り物を降りなければならなかったようです。摩尼輪塔は、楠尾神社の東の小高い場所に南面し、いくつかの石造物とともに

（市指定文化財 有形文化財工芸品）

建っています。地元に伝わる話では、本来は同様なものがいくつかあって、領主松平頼重公が現存する一基以外を白峰に移したと言われています。この摩尼輪塔は本来、楠尾神社の下乗石ですが、現在ではやや不自然な場所に立っているように思えます。しかし、楠尾神社が天正年間の兵火で焼失するまでは東面東馬場であったようで、この場所に残っているのは、このためだと考えられています。

この摩尼輪塔は、直径三〇cmの円形の塔身の縁に連珠文をめぐらした月輪の中に胎藏界大日如来を示す梵字（ア）が薬研彫りされており、その下の方柱の前面には「下乗」の文字が刻まれています。このような形状から地元では「たいこ神さん」と呼ばれています。

同様な形態のものは、先にも述べた白峰寺の東約三〇〇坪の位置に笠塔婆（県指定有形文化財）と呼ばれる下乗石があります。全国的な類例は少なく、有名なものとしては、奈良県桜井市多武峯の談山神社の摩尼輪塔があります。この摩尼輪塔は、塔身が八角形のもので製作年代（鎌倉時代後期・二・三〇三年）が判明しており、国の重要文化財に指定されています。

2

楠尾神社経塚出土遺物

くす お じん じゃ き よ う づ か し ゆ つ ど い ぶ つ

(市指定文化財 有形文化財工芸品)



楠尾神社は、袋山から南西方向に派生する舌状の丘陵の先端、瘤状にやや隆起した丘陵の先端に鎮座しています。天正年間の兵火で焼失するまでは

東面東馬場であつたようで、現在のように南面南馬場となつたのはその後の再建時のようです。この楠尾神社境内で見つかった経塚の出土遺物は、明治二十三年（一八九〇）にこの楠尾神社の社殿を拡張した際に、現在の本殿の裏側の頂上部から出土したものです。社殿工事中の発見のため、経塚の詳細な内容はわかりませんが、経塚は、盛土によつて塚のような形態をとる場合が多いため、この経塚も同様なものであつたと考えられます。

具体的な出土遺物としては次のようなものであります。

- | | |
|----------|----|
| ①銅板製経筒 | 七口 |
| ②陶製外筒 | 六口 |
| ③仿製鏡（和鏡） | 一面 |
| ④刀身残片 | 一括 |
| ⑤経石 | 七個 |
| ⑥銅板製経筒残片 | 一括 |
| ⑦陶製外筒蓋 | 一個 |

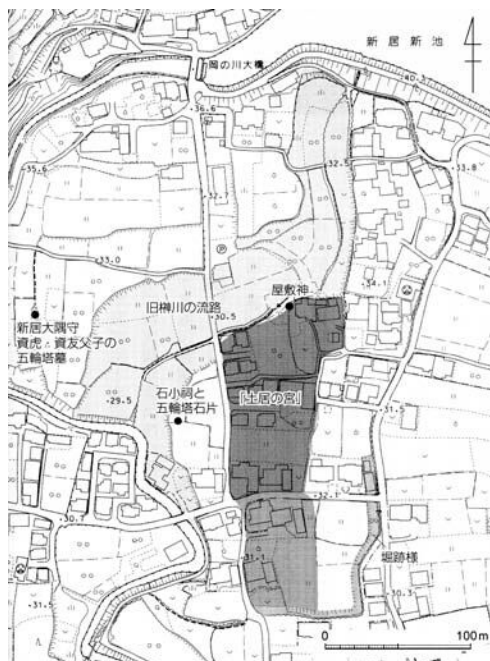


これらのうち、現在もこれらの遺物のほとんどが楠尾神社に保管されています。年号などの記念銘が残されていないため、経塚がつくられた時期は特定することはできませんが、他地域の例などから平安時代末期から鎌倉時代初期（十二世紀後葉から十三世紀前葉）にかけてのものと考えられています。

経塚は、釈迦の入滅後、正法・象法・末法と世が移り、ついには仏教が衰滅してしまうという末法思想が広まった十一世紀の後半（平安時代後期）から經典を経筒に入れ、埋納する風習が盛んになりはじめたことによって造られるようになりました。末法の世を経て五十六億七千万年後に弥勒如来が再びこの世の救世主として現れる時までの經典の保存を本来の目的としていました。そのため、寺院や神社の境内地などで発見される場合が多いのです。しかし、後世では、往生祈願や追善供養などのためにも造られるようになったようで路傍や墓所にも造られているようです。

4 新居氏館跡 にいしやかたあと

新居氏の館跡の伝承地は「土居の宮」の称が残るのは国分寺町新居中筋です。現在、館跡推定地とされる場所は、奥の谷からの扇状地に位置し、南北に長い微高地の地形を呈しています。住宅の建築等によって大きく周辺は改変されていますが、その西側は、地形や坂川の様子から流露が自然要害をなしており、南東部は細い堀状の水田が鉤型に残っているなど、館跡を示す



非常に興味深い点がいくつも認められるのです。このほかに周辺には屋敷神の小祠などもあります。また、この地が阿野郡から香西郡へと抜ける二つのルートを押さえる要所である点も非常に重要です。

以上のような点から、上の地図の範囲が新居氏館跡と考えられているのです。

新居氏の詰め城である新居城は、

この館跡のすぐ北側に位置する城山じょうやまと考えられています。その山頂部にはいくつかの平坦面や堀状の窪みが確認されています。

この他に、新居氏に関連する中世城館には、『南海治乱記』や『南海通記』に登場する新居宮尾城（新居城もしくは大谷城）という城跡があります。これは、先の楠尾神社の地に比定されています。神社境内地のため、遺構などの詳細は分かりませんが、新居氏の居城として考えられています。

この城で、旗竿を軍勢に見せかけて立てたということが記されているように、この新居地区周辺が、長宗我部氏と香西氏との合戦場の一つの舞台だったことが分かります。



3 しせきさぬきこくぶにじあと 史跡讃岐国分尼寺跡

(国指定文化財 有形文化財史跡)

讃岐国分尼寺は、正式には法華滅罪之寺と言い、天平十三年（七四一）に聖武天皇の詔勅によって讃岐国分寺とともに建立され、鎮護国家、讃岐国における仏教の普及という大きな役割を担った国営の寺院でした。

現在の法華寺の境内に金堂跡と推定される礎石が残っていることや近隣で瓦が多数採集されていたことから、

この法華寺を中心とした東西一八〇〜二一〇メートル、南北一八〇メートルの範囲が、讃岐国分尼寺跡として昭和3年2月に国の史跡に指定されています。

これまで、9回に及ぶ発掘調査が実施されていますが、伽藍配置などの構造やお寺の規模を



奈良時代後半に創建されて以後の尼寺の歴史的な変遷についてもよくわかっていませんが、先述した区画溝から十一世紀の土器が出土し、溝が埋没し始めていたことが確認されたことから、平安時代後期以降、尼寺の維持管理がなされなくなり、次第にその規模や機能も縮小していったことが推定されています。

その後、寛政七年（一七九五）に高松藩主松平頼儀公によって金堂礎石の北西隅に現在の観音堂が建てられました。そして、弘化元年（一九四四）には町内の長明寺の住持、隆乗師によって真宗寺院として復興され、法華寺と称する寺となったようです。



コラム

菅原道真と讃岐国分尼寺

仁和二年（八八六）から寛平二年（八九〇）讃岐国司として赴任した菅原道真は、讃岐国分尼寺を訪れ、白牡丹の美しさを愛でて漢詩に詠んでいます。境内にはその漢詩を刻んだ「白牡丹の碑」があり、現在も春には美しい白牡丹の花を見ることが出来ます。



法華寺白牡丹

色即為貞白

各猶喚牡丹

嫌随凡草種

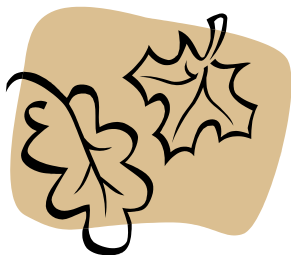
好向法華看

在地輕運縮

非時小雪寒

繞叢作何念

清淨写心肝



【意味】

色はとりもなおさず真っ白であるが、名はやはり丹という字のついた牡丹とよぶ。普通の草なみに植えるのは好ましくない。牡丹の花はまさしく仏法の光華の象徴とみるにふさわしい。地上に薄雲が凝り集まったかのようなのである。晩春だというのに時ならぬあの雪が降ったかのようにその白さはそぞろ寒ささえ覚えさせる。白牡丹の植え込みの草むらをめぐりながらどういう念願が私の心の中に沸き起こってであろうか。私は牡丹の花の清浄潔白な姿に私の心肝をうつし、注ぎたい。

『日本古典文学大系 七二巻 菅家文草菅家後集』一九六六 岩波書店 より

4 国分寺北部小学校校門

こくぶんじほくぶしょうがっこうこうもん

きゅうはしおかじんじょうしょうがっこう
(旧端岡尋常小学校)

(市指定文化財 有形文化財建造物)

国分寺北部小学校は、もとは端岡尋常小学校として明治二十七（一九八四）年に創立しました。この校門は、その開校時に建てられたもので、時の村長瀬尾景厳氏、校長林村治氏が共に格別意を注がれたようで、当時県下でもほとんど見かけることのない赤煉瓦造りのものです。その煉瓦の色と東大の赤門とを重ね合わせて、通称「赤門」と呼ばれております。現在の校門の下半分は後世に補修されたものですが、上部は建造当時のままで保存され、現在へと受け継がれています。

なお、門の上部中央に掲げられていた木製の扁額には「忠孝」の文字が刻まれていました。現在は取り外され、小学校に保管されています。



《参考文献》

唐木裕志・橋爪茂編 『中世の讃岐』 美巧社 平成十七年発行

『国分寺町の文化財』 国分寺町 昭和五十五年三月発行

『香川の文化財』 香川県教育委員会 平成八年三月発行

『香川県中世城館跡詳細分布報告書』 香川県教育委員会 平成十五年発行

『1996 国分寺町勢要覧・町制施行40周年記念号』 国分寺町 平成八年三月発行

『さぬき国分寺町誌』 国分寺町 平成十七年三月発行

